

エピソード1 高柳先生のお供で RCA David Sarnoff Research Labs. を訪問

JVC America Inc. (以下 JAI) 駐在時代の 1974 年だったと思うが、高柳先生のお供で Princeton の RCA David Sarnoff Labs を訪問し、先生の旧知である Dr. Zvorykin (撮像管アイコノスコープの発明者) や、音響学権威の Dr. Olson にお目にかかったことがある。

先生には RCA 技術研究所(東京)の山本トクゲン(徳源?)さんが日本からエスコートしてこられ、Manhattan の高級ホテルに泊まっておいでだったが、RCA 差し回しのリムジンが迎えにきて Princeton まで同乗した。このとき現地法人の M 社長でなく何故私が同行することになったか理由は定かでないが、「技術的な話題が主だろうからお前が行け」と言われた様な気がする。通訳は主に山本さんが務めたので、私は殆ど何もすることが無く、もっぱら同行していた顔なじみの RCA Licensing の人の話し相手をしていた様な気がする。よく憶えているのは、当時基礎研究始めエレクトロニクスの最先端を研究していた各研究室を案内されたとき、初めて CCD 撮像素子を見た。名刺ぐらいの大きさで、解像度も画質もまだ評価できる段階ではなくモニターにぼんやりした人の顔らしい物が写っている程度だったが。(その後も CCD 撮像素子は RCA では実用化まで開発されなかった)

余談だが、研究所には似つかわしくない豪華な dining room(記憶が正しければ RCA の創業者 David Sarnoff の Library だった部屋)で昼食が供された時、Wedgwood の dinnerware (今は日本でもよく知られている英国製最高級磁器)に初めてお目にかかった。それも高柳先生が Sarnoff 研究所の最高賓客だったからであろう。

今にして思えば、RCA が業界のトップを走っていた全盛時代であり、Princeton の David Sarnoff Research Laboratories といえば、卒業生を送り込みたいアメリカの大学にとって Bell 研究所の次に高名だったので、それなりの品格を保っていたと言えよう。

1968 年に私が JAI に赴任する前年の 1967 年には David Sarnoff Laboratories 設立 25 周年記念行事が行われ、その時高柳先生も招待客の一人として訪問されていた事が最近解った。手元に“1942-1967 twenty-five years at RCA Laboratories”というそれを記念して編纂された本があるが、その中の dinner for international guests として先生の写真があった。同席の日本人として、Prof. Seiichi Tanuma, Tokyo University;

Dr. Tsuneo Harada, of Shibaura (東芝); Shinya Maeda, of Hitachi の名前も挙げられている。



1967 年 RCA サーノフ研究所設立 25 周年記念行事に招待客として出席された高柳先生

(RCA Lab 25 周年記念誌より転載)

エピソード2 ニッパー絵画の入手

ニューヨークからロスのカッティングセンターに転勤する前の、1974年頃だったと思うが、私の下で働いていたY君がConnecticut州StamfordのUnited House Wrecking という解体業兼骨董店にNipperの油絵があるのを見つけ、私に「購入すべきかどうか」相談があった。急いで日本のI音響研究所長に相談同意を得て購入することになり、Y君が再度店に出向いて165ドルで購入しJAIに持ち込んだ。

この写真では見分けにくいですが、所々にペンキの飛沫があり、かぎ裂きもあったが、明らかに絵が飾られていた家を解体したときに回収したものと思われた。



その後日本のI所長宛に送り、日本で鑑定*の結果は本物と（贋作でも模写でもないという事だろう）解ったそうである。

*当時研究推進部勤務だったTさんの記憶では、上野の東京国立博物館に聞いた業者に鑑定と修復を依頼し35万円かかったとのことである。

1977年に私が帰国し大和の研究推進部勤務になった時は、ペンキの飛沫もかぎ裂きもきれいに修復され音響研究所玄関正

面のウインドに飾られていた。伝聞だが、最初本社に置きたいとの話があったがそれを断わって研究所に飾ることになったそうで、おかげで本社役員達に替わり多くの技術者達の目に触れる事になった。

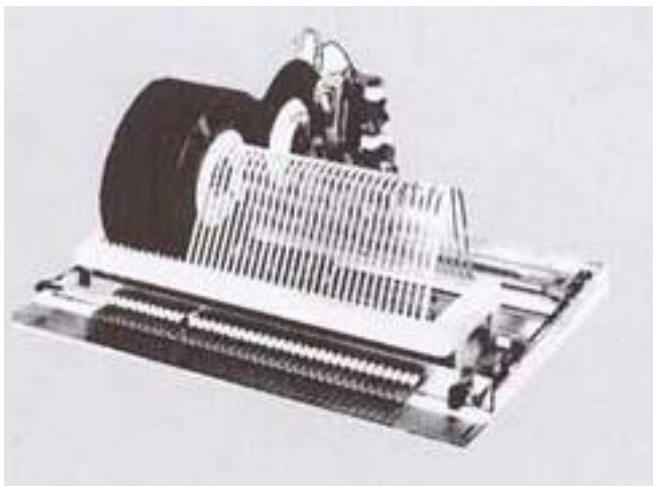
この絵の入手に関わった理由もあり、1978年暮れにNipperの絵の原画を所有しているEMIに私が手紙を書き、入手した経緯と絵のサイズなど手がかりになる情報を伝えて意見を求めたところ、「Francis Barraudは商標になった原画の他に、24枚のコピーを描いたと知られ、その中の2枚は原画より小さい27x21 inchであり、その2枚は1914年にアメリカのVictor Talking Machine社の4人の役員中の二人に送られた。その4人とはBerliner, Middleton, Staates, Atkinsonだが小型の2枚が、どの2名に行ったかまでは解っていない。従ってそちら（日本ビクター）の絵がBarraudが書いた本物なら上記の（小さい）2枚中の1枚かもしれない」との返事であった。

郷 コメント：Francis Barraudは元々売れない画家だったので、絵の美術的価値は高くはなく、従って良くある名画の様に誰かが商売のため模写したものがあるとは考えにくい。一方日本での鑑定結果と上記EMIのレターにある27x21 inchに合致するところから、Berliner, Middleton, Staates, Atkinsonの中の一人の私邸に飾られていた物だった可能性がかなり高い。それがもしBerliner（円盤式レコードの発明者）だったらと夢がふくらむが、今となっては知る由もない。

なお、この絵は研究所が久里浜に移ってからは「高柳記念ホール」に飾られているが、Berlinerが発明した円盤式音声記録再生装置（蓄音機）を象徴し、その世界的普及に貢献した一方、「世界で最も愛されている犬」といわれる程多くのファンが支持してきた文化財でもあるので、これからも大切に保存して頂きたいものである。

エピソード3 ジュークボックスのプレーヤー「ディスコマ」との関わり

スイス Gerinvex（ジーアンベックス）社のディスコマ（Discomatic Record Changer）と、その発明者で社長の Foufunis（フーフニス）には、彼の好物だった葉巻の匂いと共に次の様にいろいろ思い出がある。



1) 当時マーケティング課の A さんが Home Furnishing Daily 誌の記事からドーナツ盤レコードチェンジャー「ディスコマ」に関心を持ち、高柳先生の「これはものになるかもしれない」とのご意見も頂き、「サンプルを買いたい」と社長の Foufunis に手紙を書いた処、アメリカに売り込みに行くつもりはあるが日本に行くとしたらその帰途になる、急ぐならスイスの会社まで誰か来れば売るとの返事だった。

2) 社長室の S さん（早稲田の大学院の先輩で私と同期入社）が当時イタリアのミラノに私が駐在していた事を知っていた理由から私に指示があり、スイス、ローザンヌの近くの G 社を訪問し写真のようなチェンジャーメカ部 1 台を会社に直送して貰った。

写真はビクターとのライセンス契約を結ぶべく初来日した Foufunis（中央）を、羽田に出迎えた高柳先生他の関係者、及び寿司屋での会食（写真撮影と提供：元マーケティング課 A さん）

3) その後、ライセンス契約更改と部品キットの購入契約で Foufunis が日本に来る度に、私が通訳兼交渉仲介のサポートをした。



4) 当時プレーヤー部分の組み立ては K 事業部長の回転機器事業部だったが、スイス製のダイキャスト部品は良質だった一方、板金部品は粗悪でバリが多く、動作不良頻発で悩みの種だったので、私が「板金部品は国産化し輸入キットから除外」を提案し交渉が成立した。



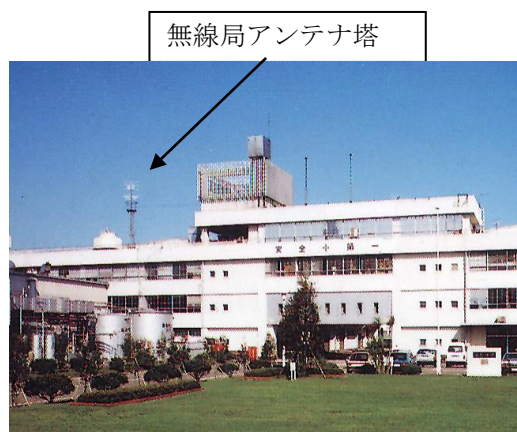
その時一寸可笑しかったのは、Foufunis が「ライセンス料の他に部品販売にも自分の利益を乗せていたのでその分は減らしたくないからライセンス料に上乗せしないとー」と言いながら私の目の前で計算を始めた事で、（板金部品メーカーは友人の会社という関係だったが、自分のスイス工場でも不良で悩まされていたことから）板金部品除外の契約変更はすんなりまとまった。

---Foufunis は根が発明家／エンジニアだったので私とは気が合い、休日に私の家族と一緒に箱根観光をしたこともあり、子供に恵まれなかった彼は学齢前の娘をととても可愛がってくれた。

5) 契約が Victor 独占だったのと、政府へのロビー活動があったのかアメリカからの中古ジュークボックスの流入を禁止出来たおかげで、ディスコマがその後 特機事業部 の主力商品になったそうで、後年同期入社の親睦会の度にジュークボックス設計担当の技術課長だった U さんから導入当時の礼を言われ、光栄に思ったものだ。

6) 意外だったのは、Foufunis は日本の演歌がすっかり気に入り、LP 数十枚を買って帰った事もあった。(歌詞は全く解らないがメロディが好きとのことだった) その Foufunis とは 1968 年の米国駐在後もクリスマスカードを交換していたが、今から数年前にガンで他界した。

エピソード4 大和工場建設時、無線電話設備で松下通信工業をへこませた話



1963年に大和工場が竣工した当時は、横浜工場との間に直通電話をすぐ引ける様な環境になかったので、代わりに簡易無線で両工場を結ぼうということになった。簡易無線局といっても、当時その運用には無線従事者が必要だったため、早大実験局開設時に(回顧録参照) 特殊無線技士資格を取っていた私が開設担当となった。

設備としては、大和／横浜工場それぞれに固定局を設ける他、協力工場回りをする計画課の

車に移動局を備えれば訪問先の電話を借りなくても済む、ということで計3台の無線機を購入する計画だった。

当時無線機業界は、真空管式からトランジスター式に移行する時期で、中でも JRC (日本無線) には既にトランジスター化した無線機があったので、迷わず JRC を選び見積とか稟議書などを進めた。ところがそれを聞きつけた松下通信工業から、「無線機は是非松下 (真空管式) を採用してくれ」との横槍が入った。私の方は相手が松下だろうと筋の通らない話は躊躇せず断る程充分若い? (ステレオ技術) 課長だったので、「車に積むのに今時 (消費電力もサイズも格段に大きく車の振動にも弱い) 真空管式は無いだろう、買って貰いたければトランジスター式にしろ」と要求した。

そこで松下通信の本音が出てきたのだが、理由は「竣工式には会長の幸之助さんが招待で来る筈だが、その時無線機が他社製と解ったら大変怒られる」との事。会長が小さな無線室まで廻る筈はなかったが、彼等は開発の遅れから子会社 (実際は松下傘下の兄弟会社の関係だが) に断わられるというメンツと、会長が怖いプレッシャーで大いに困ったあげく、「それでは当座真空管式で納入させて頂き、トランジスター式が出来たら無償で交換するから」と泣きを入れてきた。結局その案を飲むことにしたが、問題のトランジスター式は開発が遅れ、約束通り無償交換したのは私が 64 年にヨーロッパ駐在員として転出した後だった様だ。

エピソード5 大和工場「強者（つわもの）共の夢の跡」



タイルモザイクのニッパー



竣工記念樹 メタセコイヤ

どちらも 2009 年 7 月 16 日大和工場最後の納涼祭時撮影

この時は音開研ビルが解体中という状態だったが、メタセコイヤの根本には

「昭和 37 年 11 月 大和工場竣工記念樹 贈 百瀬社長」

と記した立て札（根本に写っている白い四角型）が残っていた。

今は工場敷地全体がショッピングモールになり、このメタセコイヤ（立札無し）だけが往時のビクター繁栄の面影を残している。

あとがき：このエピソード集は、私のエレキ*人生の大半を占めた日本ビクター技術者としての経験と、趣味を含めたエレクトロニクス全般についての出来事を思い出すままに順不同で書いたものです。記憶違いもありそうですがそのあたりは年齢に免じてご容赦を。

文責：郷 勝哉（1990 年日本ビクター定年退職、1995 年ビクターテクノブレーン退職）

エピソード集（1）（書き始め：2013-11-26）以上

*註）別掲「回顧録」の副題「郷 勝哉のエレキ人生回顧録」について：

「エレクトロニクス」という言葉が日本語として一般化したのは、戦後大分経ってからだと思うが、少なくとも私の少年時代には「電気」と「電子」だけでした。

一方、仲間うちでは（江戸時代の）「エレキテル」という語を面白がって「エレキ」、「エレキ」と多用していたところから、このように回顧録の副題になりました。